
Teitan high school's a love story

グッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Teitan high school - a love story

【Zコード】

N8024D

【作者名】

グッピー

【あらすじ】

ずっと小さい時から一緒にいた新一と蘭。歩美が初めて好きになった江戸川コナンこと新一。新一の優しさにひかれていく志保。三人の戦いが今始まる!! 題名の意味は帝丹高校の恋愛物語。* 新一と蘭、園子、平次、和葉の基本設定はほとんど同じです。

Prologue (前書き)

歩美の一人称です。

私は吉田歩美。帝丹高校一年生なの。今、好きな人がいるんだ。その彼の名前は工藤新一君。結構有名な高校生探偵で、かつこ良くて…。いつも靴箱にいっぴンファンレターが入っているの。

それでね、工藤君には幼なじみがいるんだ。名前は毛利蘭さん。蘭さんは空手部の女主将でとても強いんだ。歩美、こないだ蘭さんに聞いてみたんだ。工藤君のこと、どう思つてますかって。そしたら

蘭さんは

「新一とはただの幼なじみだよ。」つて言つてたの。歩美はまだチヤンスはあるつて思つたんだけど、念のために工藤君にも聞いてみたんだ。そしたら、

「蘭のことをどう思つてるかって?た、ただのお、幼なじみだよ。」
だって。だから歩美は頑張つて工藤君の心を手に入れるんだ。

Prologue (後書き)

光彦と元太も出てくる予定です。感想よろしくお願ひします。

第1話・First contact（前書き）

いきなりですが新一と歩美達が初めて会った話です。

第1話・First contact

オレと蘭は教室で歩美ちゃん達のことをついて蘭に説明していた。

「へえ～歩美ちゃん達とはあの時の潜入捜査の時に知り合ったんだ。」

「ああ。あの時はまだ探偵として活躍し始めたばかりだったからアイジラもオレのことは知らなかつたんだ。」

「一年前の帝丹高校」

「蘭、一緒に帰ろーぜ。」

「うん。」

プルルルル、プルルルル

「新一、電話鳴ってるよ。？」

「ああ。」

「ピッ

「もしもし。」

『おお、工藤君かね？』

「はいそうですが…事件ですか？」

『ああ、すまんが今すぐ警視庁に来てくれないかね？』

「わかりました。今からそちらに行きます。』

ピッ

「また事件？」

「ああ。だから悪いけど今日はひとりで帰つてくれねーか？」

「うん、わかつた。でも気を付けてね。」

「ああ、わかつてるよ。」

そしてオレは警視庁に急いで行った。

—警視庁—

「ほんにちは、高木刑事。」

「こんにちは、工藤君。今日は殺人事件じゃないけど工藤君にやつてもらいたいことがあるから呼んだんだ。」

「ふうん。で、どんな事件何ですか？」

「昨日起じた事件なんだけどね……」

—翌日、帝丹中学校—

「ねえ、知ってる？ 今日転校生が来るんだって。どんな子かな？」

「僕の予想ではかわいい女の子が来ると思いますよ。」

「じゃーもし男だつたらどんな奴が来ると思つんだよ？」

「さ、さあ……」

「歩美だつたらカツコイイ男の子がいいな。」

「コラ一席に着けえ……」

「あ、先生だ。」

「今日は小林先生が休みだからオレが担任だ。それじゃあまずは転校生から紹介するぞ。入つて來い。」

ガラッ

「うわーカツコイイ……」

「じゃあ自己紹介をしてもらおか。」

「イギリスから來た江戸川コナンです。よろしくお願ひします。」

「じゃあ江戸川の席は……。おっ、吉田の隣の席が空いてるじゃないか！ それじゃあ江戸川、あのカチューシャしてる女の子の隣に座つてくれないか？」

「わかりました。」

スタスタ

「あ、あの…」

「あ、これからよろしくな、吉田さん。」

「う、うん。あ、私のこと、歩美って呼んでいいよ。だから江戸川

君のことを「ナン君」と呼んでいい?」

「わかった。」

「ありがとう。」

第1話・First contact（後書き）

感想よろしくお願いします。

第2話・自己紹介

休み時間、コナンの周りに人がたくさん集まつた。

「ねーねー、江戸川君ってイギリスから来たんだよね？」

「ああ。」

「イギリストでどんなところなの？」

「結構いいところだよ。」

「そなんだ。」

「他にはアメリカにも行ったことがあるなー。」

「へー江戸川君って結構金持ちなんだー。」

「まあな。」

「でも何で日本に帰つてきたんだ？」

「親父の仕事の都合で帰つてきたんだよ。」「すごいですね。」

「あー、一回外国に行つてみてーなー。」

「無理だよ、元太君。金持ちじゃなきや。」

「そうですよ。それと英語もしゃべれなきゃ外国行つても困るだけですよ。」

「それよりもさ、何でコナン君はそんな名前なの？」

「それは…」

「江戸川君のお父さんがコナン・ドイルのファンで江戸川君はイギリス生まれ。だからお父さんが江戸川君に気遣つてコナンつて名前にしたつて所かしら?」

「あ、哀ちゃん!!」

「おまえ、どうして!!」

「あら、朝阿笠博士から聞かなかつたの?」「んなもの聞いてねーよ…」

「博士もボケて來たのかしらね。」

「ねえ哀ちゃんとコナン君つて知り合いなの?」「

「まーな。とにかく後で屋上に来いよ。いろいろ聞きてー」とがあるしな。」

「わかつたわ。」

「そういえばオレ達自己紹介したか?」「してないですよ。」

「んじゃあオレからな…! オレの名前は小嶋元太。オレン家は酒屋をやってんだぜ!…よろしくな。」

「僕は円谷光彦です。よろしくお願いします。」

「私は吉田歩美。よろしくね。コナン君はもつ知つてると黙つけど、この子は灰原哀ちゃん。」

「とりあえずよろしく。」

(相変わらずかわいくねー奴…)

第2話・自己紹介（後書き）

感想よろしくお願いします。

「で、何でオマーがいるんだよ！－アメリカにいたんじゃねーのかよ！」

「ナノはお弁当を食べながら話していた。

「いたことはいたわ。でも一週間前に帰ってきたのよ。お姉ちゃんにも会いたかつたしね。」

灰原哀こと富野志保は幼い頃に両親をなくし、姉の明美と一人で暮らしていた。しかし志保は明美よりも頭が良かつたので小学生の時に明美から留学を進められ、アメリカに留学していたのだ。

ちなみに父親と阿笠博士の仲がよかつたのでまだ父親がいるときに一緒に阿笠博士に会いに行つたこともある。そこで新一と出会つたのだ。

「でも何でわざわざ高校に行かずに帝丹中にいるんだ？」

「一回でもいいからここちの学校に通したかったからしゃダメかしら? 阿笠博士に頼んだら行かせてくれたわ。一ヶ月間ね。」

「それより明美さんは元気だつたのか？」

「ええ、こなした会いに行つたら元氣にしていたわ。

「元元。」

「んで、今はどこに住んでるんだ?」

「お姉ちゃんが住んでるマンションよ。」

「んじゃあ、一ヶ月間中学校は行かないと何をする？ もりなんだ？」

校に行くんでしょう?

「あ、ああ。」

「な、やはり中学校に通う間に決めておくれ。それでいいでしょ？」

「ああ。」

「私、お弁当食べ終わつたから先に教室に帰るわね。」

哀はお弁当をしまうと教室に帰つていつた。

(性格はあんまり変わつてねーみたいだな。まあ変わつていっても不
気味だけどな…)

コナンはそう思いながらペットボトルのお茶を飲んだ。

第3話・屋上で（後書き）

感想よりじくお願ひします。

第4話・休み時間が終わる前に…

一方教室には歩美、元太、光彦の三人がいた。

「そういえば次の時間、音楽でしたよね？」

「うん。 そうだよ。」

「何があつたか？」

「たぶん何もなかつたと思うよ。」

「それにしてもコナン君、帰つてくるのが遅いですね。」

「そうだね。もう袞ちゃんはとっくに帰つてきてるのに…」

「まさかアイツさぼるつもりなんじやねーか？」「

「まさか… コナン君はそんなことするような人じやないと思つけど…」

「ありますね。まだ時間はありますので一回屋上に行つてみまし

ょう…！」

「おお…！」

そう言つて光彦と元太は屋上へ走つて行つた。

「ちょっと一人とも、待つてよー…！」

—屋上—

『今日聞き込みしてわかつたことはね、犯人は柵を乗り越えて学校の中に入つてきたみたいだよ。』

『なるほど… で他は何かわかつたことはありましたか？』

『んー今のところは…』

『そうですか。ではまた何かわかつたら電話を…』

『ああ、わかつてるよ。上藤君も頑張つてね。』

『はい。では…』

バタンッ

「コナン君、見つけましたよ… 音楽の授業、さぼるつもりですね

「――」

「別にさうせんつもつはねーよ。昨日夜が遅かったからで、寝ていたんだ。」

「とにかく急がないと遅刻しちゃうつよ――」

「あ、ああ……」

「ナン達は急いで屋上から降りていった。

「そういえば、次の時間は音楽だつたよな……？」

「うそ、そうだよ。」

「（音楽の先生つてもしかして……松本先生なのか？）」

そして「ナンの悪い予感は当たつた」。

「（やつぱりあの先生だったのか！――）」

「あら、江戸川君つて工藤君に似てるわね……。」

「（最悪だ……）」

第4話・休み時間が終わる前に…（後書き）

評価、感想よろしくお願いします。

第5話：つかの間の休息

午後六時半、コナン」と新一は家に帰ってきた。

「おかれり、新一。」

「蘭ー? え? 何でここにいるんだ? おつちやんは?」

「お父さんなら麻雀よ。だから今日は一人なんだ。でも一人でこは

感想も聞きたいしね。

130

「う。」

「いただきます」

۱۰۶

「せいかじめにな。醤の料理は、」

中学校は。

「授業はつまんなかったけど、結構楽しかったぜ。久しぶりに部活でサッカーできたしな。でもやっぱり音楽の授業はつらかったよ。松本先生だったからな。まあ何でオレをタクトでたたかれたわけがわかつたからよかつたけどな。どうやら先生の彼氏がオレに似ているからいじめたくなつたらしいぜ。」

「へえー…で、事件の方はどうなの?」

「まだ解決しそうにねーな…」

「そりなんだ。そういうえば新一は犯人の見当はついてるの?」

「まだわかんねーよ。学校関係者が犯人の可能性が高いつてことしか…」

「でも何で学校関係者が犯人の可能性が高いってわかったの?」

「オレも最初は窓ガラスが割られてたから外部犯かなと思つたけど金庫の鍵が壊されてなかつたから外部犯に見せかけた犯行つてことがわかつたんだ。」

「そつか、金庫の鍵がどこにあるかを知つていなきや、鍵を壊さずにお金をとれないもんね。」

「まあな。じちそうとま。じゃ、張り込み行つてくるぜ。」

「行つてらつしゃい。気を付けてね。」

「ああ。また明日な。」

「うん。」

そして新一は帝丹中学校に張り込みに行つた。

第5話・つかの間の休息（後書き）

評価、感想よろしくお願いします。

第6話・中学生とい女子高生の秘密の話（前書き）

今回は結構長めです。

第6話・中学生と女子高生の秘密の話

次の日、「コナンが学校に来てみると元太達はコナンの机の前にいた。

「え、少年探偵団！？」

「ええ。昨日怪人二十面相を読んだんです。その怪人二十面相に少年探偵団が出てくるでしょ？それで僕達もやってみたくなつたんです。」

「（は、ぐだらねー。そんなにひんぱんに事件なんか起こるわけないのに）」「やうううよ、コナン君。」

「オレは…」

「たまにはこうのもやつてみたら？気休め程度にはなるかもよ。」

「は、灰原…お前、いつからこいに？」

「あら、さつきからいたけど？」

「ねー哀ちゃんもやるよね？」

「別にやってもいいわよ。」

「でも何でいきなり少年探偵団をやりたいって言いだしたんだ？才マエラ刑事になるのが夢じゃねーだろ？関係ねえじやねーか。」

「いえ、関係大あります！！僕は…」

「歩美、女探偵になりたいんだ。」

「ちょっと歩美ちゃ…」

「オレはえーっと…何だっけ？」

「もー元太くんつたらー。」

「あの…一人とも…？」

「つてことでコナン君も入ってくれるよね？」

「ここまで言われたら入るしかない。」

「わーったよ。入ればーいいんだる、入れば。」

「うん。ありがとう、コナン君！ー！」

「あなたって本当に探偵好きなのね。小学生の時からやっていたそ
うじゃない。探偵じつ」。

「何だよ、いきなり…」

「小学校一年生の時、博士や彼女と一緒に謎の男からの暗号解いた
んでしょ？」

「ああ、そうだけど…って何でオマーがそんなことまで知ってんだ
よ…」

「阿笠博士から聞いたから…」

「あ、やっぱ。」

「それよりこれからどうします？」

「そうだよねー。」

「悪い。オレ、トイレ行ってくつから。」

そう言つてコナンは教室を出て行つた。

「ねえ、江戸川君はまだつかしら？」

「どうどう…」

「早く教えるよ、灰原ア。」

「そうですよ。」

「じゃあ江戸川君には言つたらだめよ。」

「何で？」 「江戸川君が驚いて私達を止めるからよ。」

「そつかー。」

「じゃあ言つわよ。そこは…」

帝丹高校

一方帝丹高校では蘭と園子が教室でお弁当食べながら話していた。

「へえ～新一君、順調良く捜査進んでるんだ。」

「うん。もう少ししたら犯人捕まえられそうだつて言つてたよ。」

「でもさー、アイツの潜入先って帝丹中学でしょ？松本先生がいる
んじやないの？」

「大丈夫だつたみたいよ。」

「ふうん…あ、そうだ！！ねえ、蘭。私が作ったラブラブ大作戦、やつてみる？」

「ら、ラブラブ大作戦？」

「あんた、新一君のこと好きなんでしょ？だつたら何かプレゼントあげたら？お疲れ様の意味で。」

「プレゼントか…」

「アイツ、蘭からのプレゼントだつたら喜ぶよ、絶対。」

「本当？」

「ホントだつて。まあ頑張つてみなよ。」

「う、うん…。」

第6話・中学生ひ女子高生の秘密の話（後書き）

評価、感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8024d/>

Teitan high school's a love story

2010年11月26日13時53分発行